

量子力学 III 第 3 回レポート問題 解答

第 1 問 : Helmholtz 方程式の Green 関数

(1) $\phi_k(\mathbf{x})$ を式 (1) の解とすると、

$$(\nabla_{\mathbf{x}}^2 + k^2)\phi_k(\mathbf{x} - \mathbf{x}') = \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \quad (\text{i})$$

も成り立つことに注意する。ただし、 $\nabla_{\mathbf{x}}$ は \mathbf{x} に関する微分であることを強調した記法である。したがって、

$$\phi(\mathbf{x}) = \int \phi_k(\mathbf{x} - \mathbf{x}')\rho(\mathbf{x}')d\mathbf{x}' \quad (\text{ii})$$

とおけば、

$$\begin{aligned} (\nabla^2 + k^2)\phi(\mathbf{x}) &= \int (\nabla_{\mathbf{x}}^2 + k^2)\phi_k(\mathbf{x} - \mathbf{x}')\rho(\mathbf{x}')d\mathbf{x}' \\ &= \int \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}')\rho(\mathbf{x}')d\mathbf{x}' \\ &= \rho(\mathbf{x}) \end{aligned} \quad (\text{iii})$$

となり、式 (2) の解であることが分かる。

(2) $\tilde{\phi}_k(\boldsymbol{\xi})$ の Fourier 逆変換

$$\phi_k(\mathbf{x}) = \frac{1}{(2\pi)^3} \int_{\mathbb{R}^3} \tilde{\phi}_k(\boldsymbol{\xi})e^{i\boldsymbol{\xi}\cdot\mathbf{x}}d\boldsymbol{\xi} \quad (\text{iv})$$

を方程式 (1) に代入すると

$$\frac{1}{(2\pi)^3} \int (-\xi^2 + k^2)\tilde{\phi}_k(\boldsymbol{\xi})e^{i\boldsymbol{\xi}\cdot\mathbf{x}}d\boldsymbol{\xi} = \delta(\mathbf{x}) \quad (\text{v})$$

となる。ここで、 $\xi = |\boldsymbol{\xi}|$ と書いた。デルタ関数が

$$\delta(\mathbf{x}) = \frac{1}{(2\pi)^3} \int e^{i\boldsymbol{\xi}\cdot\mathbf{x}}d\boldsymbol{\xi} \quad (\text{vi})$$

と書けることに注意して、 $e^{i\boldsymbol{\xi}\cdot\mathbf{x}}$ の係数を比べると、

$$\tilde{\phi}_k(\boldsymbol{\xi}) = \frac{1}{k^2 - \xi^2} \quad (\text{vii})$$

を得る。

(3) 極座標系において、積分を行うと、

$$\frac{1}{(2\pi)^3} \int \tilde{\phi}_{k\pm i\epsilon}(\boldsymbol{\xi})d\boldsymbol{\xi} = \frac{2}{(2\pi)^2 x} \int_0^\infty \frac{\xi \sin \xi x}{(k \pm i\epsilon)^2 - \xi^2} d\xi = \frac{1}{(2\pi)^2} \int_{-\infty}^\infty \frac{\xi e^{i\xi x}}{(k \pm i\epsilon)^2 - \xi^2} d\xi \quad (\text{viii})$$

となる。ただし、 $x = |\mathbf{x}|$ と書いた。最右辺の非積分関数は、 $\xi = k \pm i\epsilon$ と $\xi = -k \mp i\epsilon$ にそれぞれ一位の極をもっていることに注意すると、複素積分によって積分を実行できる（上半平面に積分路を付け加えよ：第2回レポートの第2問参照）。その結果、

$$\phi_k^\pm(\mathbf{x}) = -\frac{e^{\pm ikx}}{4\pi x} \quad (\text{ix})$$

を得る。

(4) まず、

$$f(\mathbf{x}) = -\frac{1}{4\pi x} \quad (\text{x})$$

が方程式

$$\nabla^2 f(\mathbf{x}) = \delta(\mathbf{x}) \quad (\text{xi})$$

を満たすことに注意する。実際、 $\mathbf{x} \neq \mathbf{0}$ ならば、

$$\nabla^2 f(\mathbf{x}) = \left(\frac{d^2}{dx^2} + \frac{2}{x} \frac{d}{dx} \right) \left(-\frac{1}{4\pi x} \right) = -\frac{1}{4\pi} \left(\frac{2}{x^3} - \frac{2}{x^3} \right) = 0 \quad (\text{xii})$$

であり、 B_ϵ を原点を中心とした半径 ϵ の球とすると、ガウスの定理によって、

$$\int_{B_\epsilon} \nabla^2 f(\mathbf{x}) d\mathbf{x} = -\frac{1}{4\pi} \int_{\partial B_\epsilon} \nabla \left(\frac{1}{x} \right) \cdot \mathbf{n} dS = -\frac{1}{4\pi} \left(-\frac{1}{\epsilon^2} \right) 4\pi \epsilon^2 = 1 \quad (\text{xiii})$$

となる。ただし、 ∂B_ϵ は球 B_ϵ の表面（原点を中心とした半径 ϵ の球面）、 \mathbf{n} は球面状の外向き法線ベクトル、 dS は球面状の面積要素である。このことに注意すると、

$$\nabla^2 \phi_k^\pm(\mathbf{x}) = \nabla^2 \left(-\frac{1}{4\pi x} \right) + \frac{k^2 e^{\pm ikx}}{4\pi x} = \delta(\mathbf{x}) - k^2 \phi_k^\pm(\mathbf{x}) \quad (\text{xiv})$$

となり、確かに (1) の解となっていることが分かる。

第2問：Bessel関数と平面波の展開

(1) 級数

$$y(z) = z^\rho \sum_{n=0}^{\infty} c_n z^n \quad (\text{xv})$$

を Bessel の微分方程式 (5) に代入して、最低次 $z^{\rho-2}$ の係数を比べると、

$$(\rho(\rho-1) + \rho - \nu^2)c_0 = 0 \quad (\text{xvi})$$

となるが、 $c_0 \neq 0$ を仮定していたので、 $\rho = \pm \nu$ を得る。

(2) 級数を Bessel の微分方程式 (5) に代入して、次数ごとに整理すると、

$$\begin{aligned} & (\rho^2 - \nu^2)c_0 z^{\rho-2} + ((\rho+1)^2 - \nu^2)c_1 z^{\rho-1} \\ & + \sum_{n=2}^{\infty} [((\rho+n)^2 - \nu^2)c_n + c_{n-2}] z^{\rho+n-2} = 0 \end{aligned} \quad (\text{xvii})$$

となる。ここで、 z の冪の係数が全てゼロになるように c_n が決まっていく。まず、 $\rho \notin \frac{1}{2}\mathbb{Z}_{<0}$ の仮定により、 $c_1 = 0$ が得られる。また、同じ仮定により、 $n \geq 2$ に対して

$$c_n = -\frac{c_{n-2}}{n(2\rho+n)} \quad (\text{xviii})$$

が成り立つ。

- (3) まず、 n が奇数のときに、 $c_n = 0$ であることはすぐにわかる。 $s \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ として、 $n = 2s$ のとき、

$$c_{2s} = -\frac{c_{2(s-1)}}{2^2 s(\rho+s)} = \frac{(-1)^s}{2^{2s} s! (\rho+1; s)} c_0 \quad (\text{xix})$$

であることが分かる。ここで、 $\alpha \in \mathbb{C}$ に対して、

$$(\alpha; s) := \alpha(\alpha+1)\cdots(\alpha+s-1) \quad (\text{xx})$$

という記法を導入した。

- (4) まず、 $J_n(z)$ の最低次の振る舞いは

$$J_n(z) = \begin{cases} \frac{z^n}{2^n n!} + \cdots & n \geq 0, \\ (-1)^n \frac{z^{-n}}{2^{-n} (-n)!} & n < 0 \end{cases} \quad (\text{xxi})$$

となっていることに注意する。展開式 (8) の両辺に $e^{-in\theta}$ をかけて θ について、 0 から 2π まで積分すると、

$$\int_0^{2\pi} e^{-in\theta} e^{iz \cos \theta} d\theta = 2\pi A_n J_n(z) \quad (\text{xxii})$$

となる。そこで、両辺で z についての最低次の係数を比べることで、 A_n を決めることができる。まず、 $n \geq 0$ のときを考える。このとき、式 (xxii) の左辺において z^n の項は

$$\frac{(iz)^n}{n!} \int_0^{2\pi} e^{-in\theta} \cos^n \theta d\theta = \frac{2\pi (iz)^n}{2^n n!} \quad (\text{xxiii})$$

と計算されるので、 $A_n = i^n$ であることが分かる。次に $n < 0$ のときを考える。このとき、式 (xxii) の左辺において、 z^{-n} の項は

$$\frac{(iz)^{-n}}{(-n)!} \int_0^{2\pi} e^{-in\theta} \cos^{-n} \theta d\theta = \frac{2\pi (iz)^{-n}}{2^{-n} (-n)!} \quad (\text{xxiv})$$

と計算されるので、やはり $A_n = i^n$ であることが分かる。

第3問：Born 近似による散乱振幅

まず、ポテンシャル $U(\mathbf{x})$ が球対称な場合に、 $f_{\mathbf{k}}^{(1)}(\mathbf{k}')$ を書き直す。 $\mathbf{K} = \mathbf{k} - \mathbf{k}'$ とおく。

$$\begin{aligned} f_{\mathbf{k}}^{(1)}(\mathbf{k}') &= -\frac{m}{2\pi\hbar^2} \int e^{i\mathbf{K}\cdot\mathbf{x}} U(\mathbf{x}) d\mathbf{x} \\ &= -\frac{m}{2\pi\hbar^2} \int_0^\infty x^2 dx \int_{-1}^1 d(\cos \theta) \int_0^{2\pi} d\phi e^{iKx \cos \theta} U(x) \\ &= -\frac{2m}{\hbar^2 K} \int_0^\infty x \sin(Kx) U(x) dx. \end{aligned} \quad (\text{xxv})$$

ただし, $|\mathbf{K}| = K$, $U(\mathbf{x}) = U(|\mathbf{x}|) = U(x)$ と書いた。

(1) 積分の部分を計算する。

$$\begin{aligned} \int_0^\infty x \sin(Kx) U(x) dx &= U_0 \int_0^a dx x \sin(Kx) \\ &= U_0 \left(\frac{1}{K^2} \sin Ka - \frac{a}{K} \cos(Ka) \right). \end{aligned} \quad (\text{xxvi})$$

したがって, 散乱振幅は

$$f_{\mathbf{k}}^{(1)}(\mathbf{k}') = -\frac{2mU_0}{\hbar^2 K^3} (\sin(Ka) - Ka \cos(Ka)) \quad (\text{xxvii})$$

となる。

(2) 積分の部分を計算する。

$$\begin{aligned} \int_0^\infty x \sin(Kx) U(x) dx &= -\frac{U_0}{4} \frac{d}{dK} \int_{-\infty}^\infty (e^{iKz} + e^{-iKz}) e^{-z^2/a^2} dz \\ &= -\frac{U_0 a \sqrt{\pi}}{2} \frac{d}{dK} \left(e^{-K^2 a^2/4} \right) \\ &= \frac{U_0 \sqrt{\pi} K a^3}{4} e^{-K^2 a^2/2}. \end{aligned} \quad (\text{xxviii})$$

したがって, 散乱振幅は

$$f_{\mathbf{k}}^{(1)}(\mathbf{k}') = -\frac{\sqrt{\pi} m U_0 a^3}{2\hbar^2} e^{-K^2 a^2/2} \quad (\text{xxix})$$

となる。